

# 國府さんの疾走

石崎 尚 (愛知県美術館学芸員)

とりとめもなく、國府さんについて書いてみる。とはいえ、数年前のことなので大分記憶もあやしい。細かい内容については、話半分で読み飛ばしてほしい。

彼に初めて会ったのは2011年11月。藤井匡さんの企画した展覧会の一環で、藤井さんと國府さんと私の3人でトークを行ったのだった。挨拶を交わすと、なんでも京都から徹夜で車を飛ばしてきたらしい。その勢いで展示を終えて初日にトークをするという強行スケジュールで、少し疲れた様子も感じられた。

その時のトークの内容については、今でも少し反省というか悔いが残っている。無論、私としても真摯に話をしたつもりだったが、正直に言って國府さんとはどうも話が噛み合わなかった印象が残っている。日芸の彫刻コースで行われた展覧会であったため、私としては多少なりとも彫刻の話に結び付けて、学生の興味に近づけようという(今となってみれば余計な)配慮があったのだと思う。なので彫刻についての考え方や、過去の彫刻作品との比較について彼に尋ねたのだが、残念ながら腑に落ちる答えが返ってきたという記憶はない。

恐らく、自分の作りたい作品が明確にあって、それが結果として傍から彫刻と呼ばれようが何だろうが、あまりそのことには重きを置かないアーティストだったのではないか。であれば、私の方も早めに気付いて、質問の投げ方やトークの方向性を修正すれば良かったのであるが、なかなかそういう気の利いたことが出来なかったように思う。國府さんの作品は、自然環境と機械との奇妙な融合を思わせるが、まだその当時記憶に新しかった3.11の出来事を踏まえて、エネルギーやテクノロジーの負の側面に対して、人間がどのように折り合いをつけて付き合っていくのか、といった話につなげていけば、あるいは面白い意見を聞いたのかもしれないが、そういう展開にもならなかったように思う。

トークが終わった後、我々は作品のデモンストレーションを見ることになった。國府さんが自作した車を、校庭で走らせてみるというものだったのだが、そんなに広くないスペースにも関わらずかなりのスピードを出していた。その姿を見て、走る機械を心底愛する彼の純粹さに少しだけ触れた気がした。というのも、新しい自転車やおニューの文房具を自慢する男子小学生のような、全くもって屈託のない笑顔で疾走していたからだった。思わず「カッコつけマン」という言葉が

脳裏に浮かぶほどカッコ良かったし、悔しかった。

と同時に、そういうアーティストに向かって野暮な問いを投げかけた自分が、とても愚かしく思えて恥ずかしくもなった。

ひととおり彼が走った後、何人かの希望者を募って運転させてくれることになった。けれども、ついぞ私は手を挙げなかった。そのことをこれからもずっと後悔するだろう。もし手を挙げて乗っていたら、國府作品を運転した、というのは単純にすごく貴重な経験になったろうし、作品に乗って初めて分かる何かがあったかもしれない。ただ、その時は自分に手を挙げる資格がないような気がしていた。

どこの中学や高校にも、クラスに一人くらいは車マニアの男子がいたことだろう。私にもかつてそういう友人がいた。ただし全く車に詳しくない私は、彼と会話していても、車のどこが好きなのか、とか「〇〇と××の違いはどこで見分けるのか」などと、ほとんど質問魔に徹していた。恐らく友人の方はそれでも別に問題はなかったのかもしれないが、私の方はいつも聞いてばかりで、自分から何か有意義なことを伝えられないのが申し訳なく感じて、何となく車の話題は避けるようになってしまった。自分の知識のなさに、卑屈になってしまった部分もあったのだろう。もしかしたら知識量に差があったとしても成立する、コミュニケーションの方法はあったのかもしれないし、それが見つけられたらさぞや楽しいものだったのかもしれない。ただ、その時はそういうものがある可能性には思いが至らなかった。國府さんのことを考えると、どうしてもその友人のことを思い出してしまう。

國府さんとはその後も何度か会う機会があった。けれどもほとんど挨拶や近況報告ばかりで、作品の話などにはならなかったと思う。そういう話は、その気になれば、いつでも出来るような気がしていたが、無論そんなことはなかったと、痛烈に思い知ることになる。だから結局、私にとっての國府さんはいつまで経っても、初対面で楽しげに疾走していた國府さんの姿である。もっと実のある話をしておけば良かったという思いは尽きないが、それでもあの姿を見られたことだけでも、非常に幸運なことだったのだと、今となっては思う。